叶ったようで叶わなかった夢

斉藤劉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
叶ったようで叶わなかった夢

【Ｎコード】
Ｎ９９００Ｕ

【作者名】
斉藤劉

【あらすじ】
病みはじめると悲しい変態な夢を見る少年の苦労話？

重要事項？

あー、このぬいぐるみがボッキュンボンのお姉さんになればいいのに。

そんなこと思った事はありませんか？

勿論の事ながら俺こと凩耀一（こがらしよういち）は思ったことが何百回もあります！

「いやん、そんなとこ触らないでよ～。恥ずかしすぎて耀一君の顔見れなくなっちゃうじゃない」

とか

「あ、またそんなところばっかり見てるの？なんなら――（自重）」

などなどをやってみたい、もとい言わせてみたいものですよ。

え？変態だって？知ってるぜ、そんなこと。

まあ、表向きじゃあそんなにオープンなわけでもなければド変態でも変態でもない。

言ってしまえば、病んだときにやけになってそんな叶うわけのない夢でも見て自分をさげすみたくなるだけなのさ☆

つまり、俺が変態になるのは病んでいる時だけなのさ。

病んでいないときは純情でヘタレで寂しがりやで女々しくて馬鹿で天然な少年だそうだ。俺は認めていないがな！

「誰だ！こんな事を言っているのは！」

といっても

「そんなに怒るなよ。事実だろ？」

と言われてしまうのがオチなわけでなんだか辛くなるので突っ込むのはやめたものの認めてはいない。そこ重要な！

重要事項がわかったところで俺は今から部屋に閉じこもって姉たちの襲来を回避しなければならない。そんなわけで俺は寝る！

溜まる妄想

どうも、凩耀一です。ただいま酒臭い姉に愚痴を聞かされている真っ最中です。

逃げるためにドアに鍵をしめ布団にもぐりこんで小さい頃から持っているせいで抱いて寝ないと落ちつかない猫のぬいぐるみことニク（小さい頃猫と言えずニクと言っていた為にそんな名前になってしまった）を抱きしめて布団にもぐりこんでいたところ、巧妙な技を使って鍵を開け、酔っ払いの姉が入ってきて彼氏の愚痴をしこたま聞かされ初めて早一時間。さすがにもう寝かしてほしいものです。なんせただいま深夜三時過ぎなのだから。

などという願いは姉には聞きいられない。どうせただの酔っ払いで何を言っても無駄なのだ。

しばらく適当に話を聞いていると姉は寝た。しかも俺の布団で。いい加減にしろよこいつ。

そしてニクを引きずりながら向かったのはリビングのソファー。今日はここで就寝することにする。

「という事だ」

朝から友である高梨幸祐（たかなしこうすけ）に愚痴を言っていた。

「そりゃー大変だったなー」

「あー、何故かお前のその言葉が棒読みに聞こえる。不思議な事だ」

「うん、不思議だ。で？」

「で？」

「だからなんだって事だ」

本当にめんどくさそうな顔をして幸祐は言った。

「ん？だからもし、俺のニクが俺の求める女性になったらすんげー嬉しいなぁ、と」

「黙れ変態」

本当に酷い。現実逃避してもいいだろうが。

「お前な、朝起きて部屋に戻ったらパンツ一丁で姉が俺の布団で寝ているんだぞ。しかも大の字で」

ストレスもたまるというものだ。もう慣れたものだといってもあきれるしかない。しかもソファーで寝たせいで肩をこったというのにあいつはぐーすか気持ちよさそうに寝やがって。本当にムカつく野郎だ。

「とにかく、俺はあんな姉はごめんだ！」

「良いじゃないか。ほぼ全裸の女性」

「お前のほうが変態だ！俺の姉をそんな目で見るな！」

「見てねェよ、はげ。どちらかといえば俺好みの顔にして俺好みの身体にして想像しているだけだ」

という事は姉を題材にして妄想をしている、というわけだ。まあ、それぐらいならいいかもしれない。

「よし、今日は神社によって帰るぞ！」

「いきなりなんだ？」

「勿論、ニクを人にしてもらえるように神様に頼みに行くのだ！」

「やっぱりお前、面白い奴だな。よし、良いだろう。一緒に行ってやる」

ものすごく面白そうな顔をしてそう言ってくるのはムカつくがまあ嬉しいものは嬉しいわけでそれを承諾した。

そして

「どうか、ニクを人にしてください！」

俺は（人があまり来ない）神社で叫んだ。そして、幸祐の笑い声がその場に響き渡る。

「笑うなよ。こっちは割と真剣なんだぞ」

「真剣だから面白いんだ」

未だに笑ってやがる。

まあ、そんな事はどうでもいい。さあさあ、神様よ。俺の願いを聞き入れてくだせェ！

お、おおおおおおお

期待に胸を膨らませ、今日はニクをギュッと抱きしめて就寝した。だが、期待し過ぎて全く眠たくない。どうしたものか。すでに深夜二時。俺は寝てる間にあらびっくり！ニクちゃんがもうこれまた超美人になっているぞ～！っていうのを予想しているのだが、このままでは寝れない！寝なければ超美人にならない。

とりあえず！一回この部屋を出て何かしら眠たくなることをしよう。本読むとか漫画読むとか運動するとか。うん、それがいい。

それをしたのち、寝て、起きて、もうそこはパラダイスに変貌しているはずだ！

そう思って部屋を出た瞬間、何かがギシッと音をたてたような気がした。まさかのまさかだが、今現在、俺の部屋では超美人が待機しているのか！？

さっそく確かめねば！

「ニクちゃーーーーーーーーん」

「う～ん」

いる。本当にいる。まだ毛布の中でまるまって寝ているので顔も身体も見えないが、綺麗な金髪が見える。

やばい、やばい、やばい、やばい。

実際に起こってみるとテンションのあがりようが半端ない。

服は？服は着ているのか？そう言えば何も考えていなかった。後の事を考えていなかった。

「えっと、と、とりあえず」

失礼いたします。
というわけで毛布を引っぺがす。
中にいたのはまるくまるまって寝ている人。髪の毛は金髪ショート。ショートは正直俺好みだ。そして、さっき気になった服は・・・・・・着ていた。スーツのようなズボンに黒のワイシャツという服装。できればスカートがよかった。
そして顔。凄く美人。超美人とかレベルじゃなくてもう何とも言い難い。とりあえずものすごく美人なのだ。

「ふぁ～、んーー、ふぅ」

そんな事を言いながらニクちゃんは起き上がった。

「ど、どうも」

「あ？あんた誰？」

そう言う人ですか。

「えっと、俺は凩耀一です」

「あっそ。で、俺はなんでここにいる？」

俺、オレおれ俺・・・・・・・俺ええええええええええええええ！？

「ちょっと、ちょっと待って！？」

「なんだ？」

「えっと、貴方は一体？」

「俺か？俺は・・・・・たぶんその辺の幽霊。だと思う。うん、そうだった」

「お、おおおおおおおおお、男？」

「当り前だろうが」

その瞬間、全てが終わったような気がした。

非科学的意味不明物体

俺は今、むかつくほど美人な青年を目の前にしている。
金髪赤眼のそいつは本人曰く、『幽霊』などという非科学的なものだそうだ。
超美人のお姉さんを望んだのに超美人なお兄さんが来たのは予想外すぎる。というか、だれが望んで美人とはいえ、ヤローなんかと一緒にいなければならないのだ。

「で、俺はどうしたらいいんだ？」

それはこっちの台詞だ！と叫びたくなったものの、そこはこらえた。いちいち突っ込んでいたら多分疲れる。

「えっと、成仏したら？」

「成仏ってことはやっぱり俺には未練があるのか？」

「しらねぇよ！！俺はお前の名前すらしらないし。つーかいろいろ聞きたいのは俺の方だ！」

美青年は俺のことをじっくり見た後、人差し指で顔やら身体やら突きはじめた。
一体何がしたいのか全くわからない。

「何？」

「プニプニしてて気持ちいい」

こいつは一体何なのかわからなくなった。
というか、
「確かに俺は赤ちゃん肌とか言われるけどプニプニなんてしてない！」
「そうか？」
ずっと眠たそうな目で見られると怒りが増してきている気がする。
が、あくまで気のせいだと思い込んだ。
「ところで名前は？」
「俺？んー・・・・なんだったかな？」
「真剣に答えろ！」
そう言いながら頭を叩くとと幽霊だというわりにはしっかりとした感触があった。本当にこいつは幽霊なのか？
「あ、いまので思い出した。えっとね、俺の名前は、エント。・・・・だったと思う」
それでも不確実なのか。なんというか、マイペースな奴だ。
「んじゃあ、さっさと出てけ。覚えていたら喋りかけてやるよ」
そう言ってみせると、エントはキョトンとした表情になった。
「なんだよ、その顔は」

「だって出ていけといわれたら困るから」

「どうせ迷い込んで俺の部屋にいるんだろ？美女ならまだしも美男なんて望んでない」

「あれ？だってほら、神社で叫んでたでしょ。どうかニクを人にしてください、ってさ。一応俺、ニクって言うらしい猫のぬいぐるみに乗り移ってるんだよね。俺を人間として見れるのは俺がそう見えるようにした人、今のところ君だけだ」

まあ、叫びました。はい、叫びましたとも。
今思えばものすごく恥ずかしいですよ。
実際に起こればいいなぁ、とかちょっとは思いましたよ。
でもね、やっぱりさ、俺は思うわけだよ

「男じゃなくて女が良かった！！」

面倒な日常生活（前書き）

耀一の少し面倒そうな日常生活をちょっと覗いてみましょう（笑）

面倒な日常生活

「なあ、耀一、神社で叫んでどうだった？」

「耀一君、これは一体何？」

「え、ああ。すっきりした。で、これはシャーペンだ」

「シャーペン？んなもん知ってる。馬鹿にするなよ？」

「シャーペンって言うんですか。じゃあ、この四角い物は？」

「馬鹿にしてないって。馬鹿にしてるのはこの四角い消しゴムという物体すらも知らない透明人間だけだ」

「透明人間なんて失礼ですね。俺は一応幽霊って言いいましたよ」

「透明人間なんて変な事言ってどうしたんだ？」

「透明人間も幽霊も一緒だと思わないか？だって実際誰にも見えないんだ」

「幽霊は見える人には見える。耀一君にも見えてますしね」

「もしかしたら透明人間だって幽霊と一緒で誰かに見えているかもしれないだろ？」

「頭おかしくなったか？」

「頭おかしくなりましたか？」

俺こと凩耀一は自称幽霊であるエントのせいでクラスの友達、もとい悪友である高梨幸祐に馬鹿にされている。

つーか本当にうざい。二人かぶるな。ただでさえ二人（一人と一匹）と喋っていて両方ともお互いの事を気にせず喋るもんだから同時に両方と喋っているから大変なのにそう言うときだけかぶられると余計にムカつくんだよ。

「なってません」

「いきなり敬語とかやめろよ、気持ち悪い」

「気持ち悪いのは俺だ。意味不明な物体に昨日からずっと付きまとわれていると考えただけでぞっとする」

「失礼ですね。お仕置きをしましょうか？」

「そう考えているお前がこれまた気持ち悪い」

「うるさい。金髪メガネ」

二人をミックスして呼んでみる。意外にもしっくりする呼び方だった。

「俺は金髪じゃないぞ。染めたいとは思っているがな」

「俺は眼鏡をかけていません。かけてほしいんですか？」

もしかしたらこの二人、自称幽霊と悪友は意外と気が合うのかも

しれない。今度二人を合わせてやってみたいものだ。そしたらこのめんどくさい一人と喋っているように見えて二人と喋っている俺の苦労も一つ消える。エントと幸祐がお互いを認識するようになれば三人で喋ることができるのだから。

そんな事を思いながら俺は机の上に身体を預けた。

もう面倒だ。寝てしまおう。寝て、夢の中だけでも面倒ではない生活を送ろう。

そんな事を頭の隅で考えながら俺はすぐに寝た。

ぼちぼちと……

此処は俺の部屋、右にはエントがいて、目の前には高梨幸祐がいる。

そして、その二人はお互いを認識している。

というのも、うっかり幸祐の前でエントと喋ってしまったのだ。

いや、今までは自然に独り言のようにばれないように喋っていたが、反射的にもう完全にごまかしきれないほどにエントと喋っているところをばっちり幸祐に見られたのだ。

それからはもう幸祐があまりにも聞いてきて病院だの何だのとうるさいので言っちゃったわけだ。

で、今二人が認識し合っている最終だったりする。

「どうも、幽霊ことエントです」

「こちらこそ、人間の高梨幸祐です」

不自然。不自然すぎる。気持ち悪いぐらいに不自然すぎる。

「で、俺はどうしたらいいんだ？」

「しらねぇよ。なんならこいつが成仏する方法を調べてほしい」

「無理だ、馬鹿」

ですよねぇ。

うん、知ってる。だってこいつは面倒なことにはできるだけ関与しないようにする奴だし、やる気もないって知ってました。

「いいよ、一人で頑張るから」

「で、そいつ本当に成仏するのか？」

あ、ホントそこ気なるところなんですよね。だってこいつ

「俺は記憶がないから難しいですよ」

そう、記憶がない。殴って思い出したのが名前だけっていうね。残念だよね。どうしようもないよね。それはすでに知ってます。

「まあ、ぼちぼちとやって行くよ」

そう、本当にぼちぼちとやって行くつもりだ。というか、ぼちぼちとしかやっていけない。つか何もできない状況。なんか思い出せや、こら。何か、本当に何か手掛かりになるそうなことはないのか？名前とかしかない。名前しかない。

「あー、本当にどうしよう」

「さぁ、俺はどうなるんでしょうね」

隠し事をするな馬鹿

最近になって、エントが何かを隠していることが分かりはじめた。
たとえば、俺の家族についてだ。
俺の家族はじいちゃんとばあちゃんだけだ。両親は俺が一歳の時に交通事故で亡くなっている。なんでも葬式に行く途中だったとか。俺はあまりにも幼すぎたから知り合いの家に預けられていたらしい。今は父方の両親のほうで育ててもらっている。

で、そのことを何も知らないはずのエントが知っていたのだ。
なんでだよ！と、きいても

「いやいや、君の情報をかき集めていただけだよ」

と言ってくる。
それが普通に言っているならまだしも、明らかにおどおどしながら言われたら疑わないわけがない。
その時はあまりにも必死に隠そうとするので諦めたが、やはり気になる。

他にもある。
エントは気付いていないだろうが、たまにあいつが一人で行動するのを見たときに、じいちゃんとばあちゃんをなんだが懐かしい感じの表情で見ていたのを盗み見たことがあった。
記憶もないあいつが何かを懐かしむはずがないのに、あんな表情をした。

つまり、あいつは何か隠しているという事になる。

今はテスト期間中だし、面倒だから深く追求する気は全くないが、そのうちちゃんと聞かなければならない。
それが、もし成仏に関係することなのなら、さっさと成仏してほしいと思う。
別に鬱陶しいから成仏しろ、というわけではない。どちらかといえば、エントといるのは楽しいと思っているし、実際鬱陶しい時もあるが、まあそれも楽しい。
しかし、成仏しないという事は悔いが残っているという事。
やっぱり、悔いなんて残ってほしくないし、もし残っているならそれを解決してやりたいと思う。
絶対にこんな事を本人に言ったりはしないけどな。

まあ、そんなこんなで今はテスト期間中だからそんな事を考えている暇はない。

「あ、それ違うよ」

くそっ、うるさいな。テストの回答にお前が答えたらカンニングになるだろうが。まあ、誰も見てないし、知らないだろうけど。いや、幸祐には見えているか。なるほど、奴からの視線が気になるわけだ。

「あ、また間違えましたね」

「だからうるさい！」

と、叫べるわけもなく、筆談にする。

「なんでですか？」

「これ、テスト。俺のテスト。口出しするな」

「分かりましたよ。仕方ないですね」

何が仕方ないだ、この野郎。口出しする方がおかしいだろうが。
っていうか、今の筆談のせいで時間をとられた。ただでさえ分からない英語なのに何やらせてんだこいつは。
ああ、時間がない。時間がない。時間がほしい。

くそっ、今回はもう諦めるしかないのかもしれない。

そんな事を思いながらも必死に問題を解きまくった。

正直、不本意だ

テストがいろんな意味で終わってから一週間ちょい。
テスト返却のせいで軽く病み期に陥っていた俺はなんとかそこから脱した。テスト結果？　キカナイデクダサイ。
そして、エントに深く追及している途中。

「なあ、何隠してんだよ」
「いや、何も隠してませんって」
「嘘つくな」
「だから、嘘じゃないですって」
「お前、自分の表情みてから言えよ」
「見えないんで無理ですね」
「鏡は？」
「幽霊だから見えません」

とまあ、さっきからこんな調子で全く話が進まない。

「なんでそんなにも隠すんだよ」

そういうと、エントは本当につらそうな顔をした。

「正直に言うと、記憶は普通にあります。でも……内容は言えません」

過去は探るな。

という事なのだろうか。

「そか……過去がわからないんじゃ悔いを考えるのも無理なんけど。でも、まあ言いたくないならいいよ。ただ、言う気になったら言ってくれよな！」

今にも泣きそう。

本当に一ミリたりとも感情を隠さない。そこが面白いところでもあって、そんでいいところでもある。だから、少しでも力になれたらなぁ、とか思ってしまうんだろうな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9900u/

叶ったようで叶わなかった夢

2011年10月17日11時57分発行